第58回岐阜外科集談会

日時：昭和45年10月22日午後5時30分
場所：岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 胃癌の頭蓋内転移の1例

岐大第2外科
高田光昭

我々は最近19才の主婦が妊娠3ケ月頃に頭痛，悪心呕吐を来たし，それが妊娠悪阻として治療をうけ，胃癌とその頭蓋内転移の存在がみのがされていた症例を経験し，剖検する機会を得た．

妊娠に胃癌が合併することは稀で，本邦報告例も10例前後である．

剖検によると本症は未分化型腺胞型の胃癌であり，頭蓋内への転移はびまん性軟髄膜癌腫症の型をとっていた．かかる胃癌転移例としては本症例は本邦報告例中最若年である．

以上妊娠に合併せる胃癌及び，びまん性軟髄膜癌腫症症例について報告し，若干の文献的考察を加えた．

2. 結核性頭蓋骨髄炎の1治験例

岐大第2外科
佐治重豊　佐藤好永　古市信明

血行性転移によると思われる結核性頭蓋骨髄炎の1治験例を報告した．

症例：51才♀，主婦，約20年前粟粒結核で入院加療を受けた．昭和43年初め，右結核性足関関炎のため関節固定術を受けたが，この頃より軽度の頭痛，発熱，倦怠感あり種々加療するも軽快せず．同年8月頃より左後頭部に軽度の腫張を来し某医で切開を受け軽快した．本年5月頃より再び同様の症状を来し切開を受けたところ，難治性瘻孔となり当科へ転科した．赤沈は55，酸フォスファターゼ 3.4KA，σ-globuline 27.1，肺X-Pで粟粒結核と硬化性萎縮病巣あり，髄液は初圧80mmH_2Oで古い赤血球の混入と軽度の白血球増多を認めた．手術で左後頭部に約5×7cmにわたり板間層の肥厚と，ほゞ同じ大きさの多胞性の硬膜外膿瘍あり，この部の骨は脆弱で腐骨2個を認めた．病理組織学上結核様肉芽性炎症像を認めた．術後23日目に全治退院した．若干の考察も，あわせて行った．

3. 肺外傷の1治験例

国立療養所岐阜病院
浅野靖　松本守海　井上律子
加藤康夫　小林君美

最近，我々は，重篤な血気胸を続発した肺外傷の1治験例を経験したので報告する．患者は，13才の男子，主訴：右前上胸部の外傷による出血，胸内苦悶及び呼吸困難．本年8月19日，手製ロケットの暴発により，その破片が右前上胸部より胸腔内に刺入．入院時顔面蒼白，顔貌は苦悶状を呈する．呼吸は，頻回で浅く，脈拍は整．120回/分で小．右前胸部第1肋間，胸骨右縁より3横指のところに約2cmの挫滅傷あり．胸部レ線写真では，右中肺野に破片物の陰影と中等度の血気胸を認める．受傷約2時間後，右開胸術を行なう．胸腔内より約900ccの血液を排除し，胸壁の出血を止血する．破片は，右肺上葉の肺尖部より刺入してS_3の部分に存在しているのが認められる．肺を切開し，約1×1×0.1cmの鉄破片を摘出し，肺を縫合して閉胸した．その術後経過は，良好である．

4. 心膜欠損症の1例について

国立療所　岐阜病院外科
○松本守海　小林君美　加藤康夫
井上律子　浅野靖

我々は，最近，心房中隔欠損症に合併した左心膜全欠損症の1例を経験したので報告する．症例は14才の男子，気管支炎の既応があり，学校検診で心肥大を指摘されているが，自覚症状はない．坐位で第Ⅱ肋間胸骨左縁，仰臥位で第Ⅳ肋間胸骨左縁に最強点を有するLevineⅢ度の収縮期雑音を聴取する．胸部レ線所見としては，肺紋理および肺血管影の増強，左第Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ号の膨隆および著明な肺門ダンスが認められる．心音図で，不完全右脚ブロック，左室肥大を認める．心音図で，Ⅰ音の減弱，Ⅱ音の亢進分裂を認め，アミルの負荷で増強．メキサン負荷で減弱する収縮期雑音を認める．以上の所見から，ＡＳＤと診断，胸骨縦切

開で開胸したところ，左心膜全欠損を認めた．型の通り体外循環下にＡＳＤを縫合閉鎖後，心膜と左胸壁肋膜を縫合して，閉胸し，手術を終了した．その術後経過は良好で，現在のところ，左心膜全欠損によると思われる症状は認められない．

5. 胃および乳腺重複癌の1例

岐阜市民病院外科　松　岡　俊　彦

同時あるいは時を異にして，同一個体に2個以上の原発生悪性腫瘍が発生したものを重複癌と呼んでいるが，最近胃癌手術後約7ケ月で右乳癌を来した症例を報告する．

60才の女性で胃集回検診にて胃癌を指摘され45年1月16日入院手術を行なった．周囲組織への転移，リンパ腺の腫脹は認められず，組織検査では Adenocarcimoma であった．その後特に異常なく経過していたが45年8月16日右乳腺腫瘍に気づき組織検査の結果 Skirrnhus であった．

6. 経皮経肝胆管造影について

岐阜日赤外科　松浦昭吉　原　節雄
岐大第1外科　後藤明彦　国藤三郎
関野昌広

高度黄疸症例，特に閉塞性黄疸例を中心として，経皮経肝胆管造影（P.T.C）について報告した．その内訳は，悪性腫瘍9例，肝炎2例，胆石症1例で，悪性腫瘍の内，膵頭部癌3例，総胆癌3例，胆嚢癌2例，肝癌1例で，黄疸持続期間は，7日より100日まであった．

外科的な P.T.C の適応の内，その手術適応の決定の有用性と安全性を強調するとともに，肝内胆管0.7㎜以上あれば P.T.C の可能であり，その内，合併症の危険性を警告した．

7. 総胆管末端部嵌頓結石の1例

県立岐阜病院外科
鷲見靖彦　本多雅昭　須原邦和

症例，41才男子，10年前より胆石に由来すると思われる仙痛発作あり，内科にて経皮胆管造影等の検査により，胆のう内結石，総胆管末端部嵌頓結石の確定診断を得たので手術療法を行った．手術時，胆石を含んだ胆のう摘出を行うと共に胆のう管より前記嵌頓結石を検するに，乳頭部は直径3㎜のゾンデを容易に通じ得，結石の感触もなかった．術中胆道造影にて，術前経皮胆管造影と全く同様に乳頭膨大部に陰影欠損を認めたので経十二指腸的乳頭部切開を施行し粘膜内に包まれたように嵌入した結石を摘出した．

胆のう摘出後症候群の原因として胆石の遺残，乳頭部の狭窄があげられるが，術中，少なくとも二つの補助診断が必要なる点，及び経十二指的乳頭切開の適応について文献的考察を加えた．

8. 右大腿部に発生した横紋筋肉腫の1例

岐大第1外科
棚橋徳重，関野昌広
桧垣　潜，後藤明彦

症例は30才，男で，5年程前より右大腿部に米粒大の無痛性の腫瘤に気ずき，そのまま放置しておいた所6×8㎝の腫瘤に増大した．摘出した所，大腿四頭筋にゆ着したカプセルを有する腫瘤で，表面平滑，弾性軟で，病理組織検査の結果，横紋筋肉腫であった．

大腿リンパ節生検の結果転移は認められず切断術をすすめた所，同意が得られないため，エンドキサン3000mg，投与し，大腿動脈より5-Fu 3000mg の持続注入の処置にて退院した．

9. 後腹膜腔に発生した Lymphangioma cystica の1例

揖斐病院外科
大前勝正，佐藤　収，星野睦夫

症例：50才，女

左下腹部の無痛性腫瘤を主訴として来院，諸検査にて後腹膜腫瘍と診断，手術施行す，手術時所見：左尿管を外方に圧排，内側は腹部大動脈，下大静脈に接する大きさ4×5×6㎝の嚢腫あり，全剔出す．病理組織診断にて Lymphangioma cystica の所見であった．悪性像は認められなかった．守の昭和33年1月より昭和43年1月までの詳細の明らかな後腹膜腫瘍193例中リンパ管腫は5例でありそのうち良性あるいは悪性像なしと記載されたものは1例である．

本邦において統計上後腹膜腔の Lymphangioma cystica は比較的まれな疾患の如く思われる．

10. 複雑な経過をたどつた Congenital spinal dermal sinusの1治験例

岐阜大学　第2外科
○佐治董豊　古市信明　国枝篤郎

Congenital dermal sinus の1治験例を報告した

尚本症は稀れな疾患故に誤って某医で切除術を受け髄液瘻となった症例である.

症例：生後5日目♂，生下時体重3250g 家族歴，妊娠歴ともに特計すべきものなし，現病歴，生来仙尾骨部に小指頭大の腫瘤あり生後2日目に剔出術を受けたところ術後2日目より髄液の流出を来し当科へ入院した．現症及び局所所見：体格中等で軽度の新生児黄疸あり，仙尾骨部で肛門より1.5cm 尾骨よりの正中線上に瘻孔あり，瘻孔より髄液の細菌検査でG(-)のCoccus と Bacillus を証明，生後10日目に気管内挿管全麻下に根治術施行．Sinus は第3仙椎の高さで脊髄管の中へ入っており直径約 2mm 組織標本でDermoid 等の腫瘍所見なく，Sinus の内腔は壊死反応のためか皮膚上皮組織は判然とせず．術後10日目より，髄液が少なく膿様となり，pentrex および keflodine を髄液内へ注入し，術後49日目全治退院した．合せて文献的考察も行った.

11. 外傷性腓骨動脈瘤の1治験例

岐大1外科
小川隆司　広瀬光夫　村瀬恭一

最近の血管外科の発展に伴ない胸部，腹部の大動脈瘤の報告は増加しつつあるが，四肢動脈瘤についてはあまり記載されていない．我々は最近，外傷性腓骨動脈瘤を経験したので報告した．症例は19才，男子で昭和45年7月9日道路に置かれていたウインドーガラスにつまづき，右膝直下を損傷し某医に入院し以後20日間位の内に3回大量出血を生じ我々の施設を訪れた，大腿動脈造影にて Peroneal artery に母指頭大の動脈瘤を確認し，腰麻下に下腿外側より A.popliteaに達し peroneal artery を結紮した．術後経過良好にて全治退院した.

12. Triangular Volar Flap による指断端形成術について。

岐阜市民病院　整形外科
○笠原吉孝　渡辺　良　岡　正典
中根康雄　宮田慶男

我々は最近，右母指及び示指の末節部切断を来した18才女子の症例に対して Atasoyらの報告した Triangular Volar Flap による指断端形成術を施行し良好なる成績をおさめたので報告した.

第59回岐阜外科集談会

日時：昭和45年12月22日午後5時30分
場所：岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 頭蓋内 Cholesteatoma の3例

岐大第2外科　樫　木　良　友

(昭和45年12月22日)

頭蓋内に発生した所謂 Cholesteatoma の3例について若干の考察を加え報告した.

症例1．65才の女子．4年来の頭痛，浮動感，右眼瞼下垂，右視力障害にて来院．脳血管写にてトルコ鞍部腫瘍と診断．視束交叉直下に小クル実大の灰白色 Cyste を全摘．組織学的には Cholesteatoma (epidermoid) であった.

症例2．61才女子．1ケ月前よりの右耳漏，難聴，頭痛にて来院．頭部単純レ線像で右後頭部骨破壊を認め，脳血管写にて右後頭葉腫瘍と診断．右耳介後方より右S字状静脈洞に到る灰白色の鶏卵大硬膜下 Cyste を摘出．組織学的に耳性 Cholesteatoma であった.

症例3．47才男子．6年来の左前額部無痛性腫瘤にて来院．頭部単純レ線像にて左前額部骨破壊像，脳血管写にて左前頭葉腫瘍と診断．左前頭部硬膜下の暗赤色の Cyste を全摘．組織学的には Cholesteatoma (epidermoid) と診断された.

2. われわれの行なった水頭症に対する shunt operation について

岐大第2外科
安藤　隆　田中千凱　高田光昭
国枝篤郎　坂田一記

水頭症52例に対して過去7年4ヵ月間に施行した脳室心房連絡術63回，脳室腹腔連絡術21回について，そ